

## 宮沢賢治における宗教と文学

京都大学 心の未来研究センター 教授  
鎌田 東二

### <講演前の楽器演奏>

私は、毎朝起きてすぐに、比叡山に向かってお祈りします。埼玉の大宮に住んでいた頃は、家に祭壇を設けてお祈りしておりました。京都に引っ越して10年になりますが、来た時に比叡山というお山があるのに、家の中に祭壇を設ける必要があるだろうか、と考えました。

結論は、祭壇は必要ない、お山を神仏として拝すればよい、というものでした。山をご神体とする思想が日本には各地にあります。まさに比叡山はご神体のお山で、毎朝、祝詞を唱え般若心経を唱え、また各種真言を唱え、石笛（いわぶえ）・横笛・法螺貝・太鼓・鈴・ハーモニカなど、三十数種類の楽器を奉納演奏して、比叡山に向かって祈りを捧げます。

今日は宮沢賢治の第81回忌ですので、わが三種の神器の演奏を宮沢賢治さんの御霊に捧げます。

「(編者注):このような前置きの後、甲高い音色の岩笛(質問1)を、次に尺八よりも穏やかな音色の横笛を、そして最後は、独特の腹に響く音色の法螺貝と3種の楽器を見事に演奏されました」



### I、宮沢賢治における宗教

さて、本日は、宮沢賢治の特に宗教に焦点を当てながら、文学との関わりを考えていきたいと思います。21世紀の問題点を探り、その解決策を考える時に、宮沢賢治から何を学ぶことが出来るのか。賢治の感性と想像力と表現力と行動力を、宮沢賢治の言葉と思想と生き方を通して学んでいくことが出来れば、と思います。

私は宮沢賢治が大好きで、宮沢賢治を心の師と仰いでおりますが、宮沢賢治自身が師と仰いでいる先達は、伝教大師最澄、日蓮、田中智学の三人です。本日、私たちがいるこの比叡山は、最澄が開き、法然、親鸞、栄西、道元、日蓮ら、鎌倉新仏教の祖師方を輩出しました。宮沢賢治の家の宗教であった浄土真宗の開祖・親鸞も比叡山の横川で堂僧として修業し学びました。このようなことを考えると、比叡山は、宮沢賢治にとって自分の宗教と信仰の根拠地と決めて言いすぎではないでしょう。その81回目の宮沢賢治忌に参列することが出来て本当にうれしく思っています。

本年3月に、岩手県の盛岡城、宮沢賢治の学んだ旧制盛岡中学から近く、石川啄木が「来来方(こずかた)のお城の草に寝ころびて/空に吸はれし十五のころ」と歌った城跡に行きました。この盛岡市のど真ん中の神社、城跡にある神社(編者注:桜山神社)のご神体に「烏帽子岩」という巨大な岩があります。盛岡中学校の生徒であった石川啄木もその後輩の宮沢賢治も、授業をさぼって城跡に来て、烏帽子岩に触ったりして、いろいろ未来のことなどを考えていたのでしょう。

その宮沢賢治がどのような宗教を持っていたかを考えてみましょう。賢治は、アミニズム、シャーマニズム、トーテミズムという最も宗教の根源に近い考え方を持っていたと思います。その上に、家の宗教である浄土真宗や、地域の秘密宗教文化である隠し念仏や、自分が選び取った信仰である法華経や国柱会の宗教理念が重層的に折り重なっていると思います。さらに加えて、宮沢賢治の宗教的感覚には、宗教とは方法論的には異なるけれども、根本的なところで同一の志向性を持っていると賢治自身が考えた、最新の科学と結びつけた「銀河教」と「宇宙教」ともいえるような宗教感覚があった、ということこれから縷々お話してい

きたいと思います。

### <アミニズム>

アミニズムとはどういうものなのか、先ほどの法要で横山照泰比叡山行院々長先生が「森羅万象に魂が宿っている」「森羅万象が一緒である」と言われました。「草木国土悉皆成仏」とは、かの有名な天台本覚思想のキーワードですが、天台宗には「本覚」という思想が生まれました。それは、あらゆるものは仏性(本来覚性)を蔵し仏となる可能性を持っているが、実はそもそも本来もうすでに仏であって悟っているのだという急進的な思想ですが、そのような本覚思想を支えていたのもアミニズムと言えます。

一般には、アルバータ・タイラーという宗教学者が提唱してから、あらゆるものに魂が宿っている、森羅万象に魂があるあるという考え方をアミニズムと言うようになりました。

それでは、宮沢賢治の作品においては、そのようなアミニズム的感覚や世界観はどのように現れているでしょうか? 「狼森(おいのもり)、笹森(ざるもり)、盗森(ぬすともり)」という有名な童話があります。その冒頭は、次のように始まります。

「一番左が狼森、その右が笹森、その次が黒坂森、北のはずれが盗森です。この森がいつごろ、どうして出来たのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それを一番初めからすっかり知っているものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巖(いわ)が、ある日威張ってこのおはなしを私に聞かせました。(中略)「さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして、毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰いました。しかしその栗餅も、時節がら、ずいぶん小さくなったが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまんなかのまっくらな巨きな巖がおしまい云っていました」。

ここに、アミニズム感覚があります。「森が云っている、岩が云っている、話している、命を持っているいろんなことを話している、おしゃべりしている」という表現と、それを当たり前のように受け止める感覚がそれです。あらゆるものが通じ合い、語りあい、心を通わせることが出来る、そういう信念や態度が「アミニズム」という思想と感覚の表れです。

同じく「注文の多い料理店」の一番最後に収録されている「鹿踊りのはじまり」の冒頭は次のように始まります。「そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽は赤くななめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いていた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行われていた鹿踊りの、ほんとうの精神を語りました」。

ここで重要なのは、「風」です。そして、それがやがて「声」となり「言葉」となっていくところです。「銀河鉄道の夜」の童話で言えば、ジョバンニに「銀河ステーション」と聞こえてくる、到来する声、です。

野原に座ってのんびりしていると、疲れのためかだんだん眠りこんできて、ザーザーという風の音が、やがて、「あのね、鹿踊りはね」というように、人の言葉に聞こえてくる。そして、「鹿踊りのはじまりとは、かくかくしかじかである」という物語を風が伝えてくれたのです。そういう「風」の話は、「アミニズム」感覚の世界で成立するお話であり、その「風」の「声」を「言葉」として「お話」として聞き取ることで出来る人は、「シャーマン」と言えます。

シャーマンとは、眼に見えない不可視の霊的な世界の霊的な情報を伝えてくれる媒介的存在です。「メディア media」と同語源の「ミィーディウム medium」「霊媒」と訳されますが、その霊的媒介者も「シャーマン」の一種と言えます。簡潔に言えば、人物に焦点を当てるとシャーマニズムとなり、風や森などの自然や自然現象に焦点を当てるとアミニズムとなり、動物に焦点を当てると、トーテミズムになると言えるでしょう。

### <トーテミズム>

例えば、「私は鹿の子孫である」とか、「私の先祖は鹿である」という言い方や考え方がトーテミズムです。僕の先祖は鷹である、蛇である、龍であるというように、ある特定の動物や植物が自分の先祖で、それを崇め、絶対にそれを殺したり冒とくしたりすることがない、そのようなトーテム動物と自分の家系(クラン)との神秘的な絆を信ずるのがトーテミズムですが、そういうトーテミズム的感覚も宮沢賢治にはあると思

ます。

「鹿踊りのはじまり」の最後に、次のようにあります。

「そこで嘉十はちょっと苦笑いをしながら、泥のついて穴の空いた手拭をひろってじぶんもまた西の方に歩き始めたのです。それから、そうそう苔の野原の夕陽の中で、私はこのはなしをすきとおった秋の風から聞いたのです」。

この前の場面で、鹿たちは嘉十という農夫の落とした手拭を、フンフンとおいを嗅いだり、恐くて逃げ帰ってくるしぐさをしたりします。落とした手拭を取りに帰って、ハンノキの木の下でまるで踊りを踊っているような鹿たちの様子を見て、我を忘れた嘉十は自分も鹿のようになって鹿たちの輪の中に入って行きます。鹿と自分の間の境が溶け去り、区別がつかなくなってゆく。先ほど、天台本覚思想の「草木国土悉皆成仏」のことを言いましたが、あらゆるものに境も区別がない境地。この時嘉十の心の中には「自分は鹿の仲間だ、兄弟だ、鹿と一体だ」という感覚があったと言えます。こういう考え方は、アニミズム的でもシャーマニズム的でもあります、トーテミズム的でもあります。

その、「トーテム」という言葉を実際宮沢賢治は使っているんです。『宮沢賢治全集』第四巻に収められた「春と修羅 補遺」の中の「会見」と題する詩篇に、次のようにあります。

「(このたくましき頬骨は／やっぱり昔の野武士の子孫／大きな自作の百姓だ) (息子がいつでも云ってゐる技師といふのはこの男か／も少しからだも強靱くって／何でもやるかと思つてゐたが／これではとても百姓なんて／ひどい仕事ができさうもない／だまって町で月給とつてゐればいいんだが／(お互じつと顔を見合わせ立ってゐれば／だんだん向ふが人の分子を喪くしてくる／鹿か何かのトーテムのような感じもすれば／山伏上がりの天狗のやうなところもある)

「父と会ふ」には、「フランドル型の逞しい頬骨と／大きく深く切れたこの眼／だまってじつと眼を見合わせて立ってゐれば／だんだん向ふが人の分子を喪くしてくる／鹿のトーテムは／立派な山伏上がりの天狗の感じも確かにある」とほぼ同様に詩句があり、どちらにも、「鹿のトーテム」という言葉が出てきます。

ここでは、いろんな声が聞こえてきます。ここに宮沢賢治の詩の作り方と彼の非常にシャーマニスティックな世界があります。多次的にいろんな声が聞こえてくるわけです。お互いに顔を見合わせて、待っていればだんだん向こうが人の分子を失くしていつて変容していく。鹿のトーテムは天狗のようでもある。

こういう、分子的に存在変容する世界が、宮沢賢治の世界感覚でした。法華経という仏教的な世界観を持つ以前から、宮沢賢治は大変根深い原始宗教的感覚を持ち、それで生きていたのです。

人間も動物もトーテムも天狗も、分子レベルでは同じで、その組み合わせで変形していくにすぎない。人も分子を失くして見えてくる。その時トーテムという言葉は賢治は使っている。だから、天狗のような存在と動物と人間の境がない。そんな感覚です。

もう一つ、「疑獄元凶」と題する小説で、賢治晩年の作品です。小川平吉という元鉄道大臣が疑獄でつかまった時のことが書かれているのですが、ここにも、「いつか向ふが人の分子を喪くしてゐる。皮を一枚脱いだのだ。小さな天狗のようでもある。それから豺(さい)のトーテムだ。」という、存在変容のさまが描かれています。検事と被告が向き合っている心の風景を描いているのですが、なかなか不思議な光景です。人間の分子を失くして、皮を一枚脱ぐと、小さな天狗のようでも、豺(さい)のトーテムのようでもある。

このように、宮沢賢治は「トーテミズム」という言葉や概念をよく知っていたのです。この時代、人類学や宗教学や民俗学において、「トーテミズム」は最新の知識でしたが、宮沢賢治はそういう現象や研究に関心を持ち、よく勉強もし、動物と人間の間に境がないという感覚をトーテミズムが持っていることに非常に共感していたのです。

#### <シャーマニズム>

「トーテム」と同様に、賢治は「測候所」と題する心象スケッチの中で、「シャーマン」という言葉も使っています。

「シャーマン山の右肩が／にはかに雪で被はれました／うしろの方の高原も／をかした雲がいつばいで／なんだか非常に荒れて居ります／・・・凶作がたうとう来たな」とか、「シャーマン山の第七峰の別当が／錦

と水晶の袈裟を着て／自分で出てきて諫めたさうだ」とか、「濃い雲が二きれシャーマン山をかすめて行く」とあるのがそれです。この「シャーマン山」とは、修験道の霊山である早池峰山のことだろうと考えます。

シャーマニズムは「ある霊的な世界や現象と向き合い、それをこちら側の世界に媒介する」現象と信仰です。そのシャーマン的感覚と聖なる場所の近くに関して、「小岩井農場 パート九」で大変興味深い表現をしています。それは「**der hailige punkt**(ダー・ハイリゲ・プンクト)」という表現です。

「さうです 農場のこのへんは／まったく不思議におもはれます／どうしてかわたくしはここらを／**der heilige punkt** と／呼びたいような気がします／この冬だって耕耘部まで用事で来て／ここいらの匂の／いふぶきのなかで／なにとはなしに／聖いところもちがして／凍えさうになりながら／いつまでもいつまでも／いったり来たりしてゐました」。

この「**der hailige punkt**」に来ると、宮沢賢治いつも清らかな心持がするというのです。だから、ここにいつまでもいたいので、つい離れがたくて行ったり来たりしてしまう。この「**der hailige punkt**」は、英語で言うと、「the holy point (聖なる地点)」とか「the sacred place」です。

私も一週間に一回は、歩いて比叡山に登り、必ず山頂付近の「つつじヶ丘」に行きます。この5年ほどで250回ほど登って、この場所に立っています。本当に美しい眺望の良いところで、おそらく比叡山の中で最も眺望の美しいところでしょう。

ここが私の「**der hailige punkt**」です。ここに、十数体のお地藏様の石像があります。このお地藏様の前で般若心経と各種真言を唱え、その後そこでバク転を3回するのが私の生きがいなんです。ここで、バク転を3回することには意味があります。天台宗の千日回峰行には到底及びませんが、バク転は自分のできる限りの行なのです。そこで、天に向かって1回、地に向かって1回、人に向かって1回のバク転を行います。合計3回。これは、当年62歳の私にとっては、大げさでなく命がけの行です。というのも、一つ間違えたら、首の骨を折って死ぬことになりますから。



延暦寺会館研修室 聴講風景

ともかく、このつつじヶ丘が聖なる場所なので、そこで、祈りを捧げたいのです。それが、宮沢賢治のいう「**der hailige punkt**」だと思います。そこで神仏と相まみえる。到来するメッセージや存在を受け止める地点。

賢治はまた、同詩篇の中で、「幻想が向府から迫ってくる時は／もうにんげんの壊れるときだ」と書いています。幻想、ビジョンやメッセージが向こうから迫ってくる時は、異次元と交流しているのです。そのようないろいろなモノを宮沢賢治は見たのです。続けて、「私ははっきり眼をあいて

あるいてゐるのだ／ユリア ペムペル わたくしの遠いともだちよ／わたくしはずるぶんしばらくぶりで／きみたちの大きなまっ白なすあしを見た」とか「ちがった空間にはいろいろちがったものがある」と言っています。

賢治は、幽霊もお化けもいっぱい見ました。そういう、目に見えないモノを見る感覚というのはシャーマニズム的感覚です。そういうものを賢治は「幻想」と言っているのです。目の前でパッと世界が変わっていったり、パノラマ的に光景が変わったり、二重写しになったりして、そこに、目に見えない存在が浮かび上がってくるのです。

仏教には十界論があります。世界は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、仏の地獄界から仏界までの十の段階がある。その中で、下層の六つの世界、つまり「六道」を輪廻する存在であるのが人間で、その上にも下にも、人間以外の存在がいる空間もあるのです。

そういう、目に見えない違った空間には、いろいろと違った存在が住んで、活動しているわけです。様々

な目に見える諸動物、植物もあるけれども、目に見えない生き物もいろいろとある。目に見えない存在、例えば、神とか精霊とか死者の霊とか天使とか四天王の毘沙門天とか。そういう見えないものを見る形に可視化することで仏菩薩像ができてきたのだと思いますが、いずれにしても、見えない諸層がいろいろな形で働いている、この世界はそういう厳格なる階層世界である、というのが、宮沢賢治の世界の捉え方で、だからこそ「俺は一人の修羅なのだ」という「春と修羅」の言葉もリアリティを持つのですが、そのような賢治の世界かが詩歌や童話に様々な形で投影されています。

「東岩手火山」の中には、真言のような「月は水銀、後夜(ごや)の喪主」という言葉が繰り返して出てきます。「月は水銀」というのは、ヨーロッパの錬金術においても、中国の気功などの丹道においても、水銀はいろいろなものを変化させる力と技術の象徴です。その水銀のような変化力を持つ月を見ていて、主人公である宮沢賢治自身の意識状態が次々と変化していき、鳥の声が聞こえてきて、月が二つに見えてきます。意識構成が変化して見えてくるものが違ってくるのです。いわゆる変性意識状態に突入するわけですね。

最愛の妹とし子が死んだ後、死者となったとし子と霊界通信をしようと賢治は考えていました。「永訣の朝」以後に書いた「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「宗谷挽歌」などの挽歌群に、死者との交信を試みようとする形跡が読み取れます。東北の青森県下北半島の恐山では、死者と交信するイタコの民間信仰がありますが、宮沢賢治もまたそういう民間信仰と通じ合うシャーマニスティックな世界観と霊的感覚を持っていました。そして死んだとし子と交信して、霊界情報を受信することが出来ると思っていました。そういうことを実際に実験したのです。「けれどもとし子の死んだことならば／いまわたくしがそれを夢でないと考えて／あたらしくぎくつとしなければならぬほどの／あんまりひどいげんじつなのだ／感ずることのあまり新鮮にすぎるとき／それをがいねん化することは／きちがひにならないための／生物体の一つの自衛作用だけれども／ほんたうにあいつはこの感官をうしなったのち／あらたにどんなからだを得／どんな感官をかんじただらう／何べんこれのかんがえたことか」、「みんなむかしからのきょうだいなのだから／けっしてひとりをおいてはいけない」。

とし子の死は、夢ではなく、新しくギクツとするほどのひどい現実です。感じる事があまりにも新鮮すぎる時、概念化することは狂気に陥らないための人間の「自衛作用」だと賢治は理解していました。わかるということ、位置づけるということ、マッピングすること、交通整理することでバランスをとるわけです。

宮沢賢治はここで、とし子が肉体という現実の「感官」を失って、どんな「からだを得、どんな感官を感じたか」と問いかけています。つまり、肉体的身体から霊的身体に移行したはずだと推察しているのです。そこで、どういう死後の世界、霊的世界にとし子が行っているのかと考えて霊界通信しようとしたのです。そして、「あらゆる生命はみんな昔から兄弟だから、決して一人のことを祈ってはならない」とか、実は「私という現象も一人ではなく、いろんなものの多層的な通じ合い、重なり合った身体であり心である」と言っています。「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／一つの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体)」と。

#### <注文の多い料理店 序>

この童話集の序に、「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことが出来ます。／またわたくしは、はたけや森の中でひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、変わっているのをたびたび見ました。／「わたくしは、そういうきれいなたべものやきものがすきです。(中略)これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月明かりからもらってきたのです。／ほんとうに、かしわばやし青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、震えながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたがないのです。／ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたがないということ、わたくしはそのとおりに書いたまです」と記しています。このお話は自分が書いたものでない。自分の頭や心がイメージしたものではない。その話はみんなもらってきたものだ、林、野原や鉄道線路や、いろんなところからもらってきた。そんなモノや場所からお話をもらってきた。それを

私はその通り書いただけだと主張しています。そしてそれが、「あなたのすきとおった本当のたべものになることを、どんなにねがうか分かりません」と言います。すきとおった本当の食べ物とは、「魂のたべもの」になることで、人間の深い深い心の栄養になることを願うということです。

### <龍と詩人>

龍と詩人には、若者の詩人スールダッタが出てきます。スールダッタは詩のコンクールで優勝します。そのせいでアルタという古い詩人がその座を下りて去ります。スールダッタが優勝した詩を作ったのは、彼にとっての der hailige punkt である岬の突端でした。スールダッタはそこに立つといつもインスピレーションがパァッとひらめき、詩の言葉が浮かんでくるのです。つまり、詩人スールダッタは岬の突端の聖なる場所にいて瞑想状態になるわけです。するとそこでいろんなイメージが湧いてくる。それを彼は詩に書き、コンクールで優勝した。ところが、どこからか「あれは盗作だ。龍のチャータナの歌を盗んだのだ」というひそひそ声が聞こえてくるのです。ギクっとしてスールダッタは岬の突端に行き、千年の間、洞窟に閉じ込められたいた龍の歌が自分に聞こえてきたと気づいて、龍に謝ります。すると龍のチャータナがこう言います。「スールダッタよ、あのうたこそはわたしのうたでひとしくおまえのうたである。いったいわたしはこの洞に居て歌ったのであるか考えたのであるか。おまえはこの洞の上においてそれを聞いたのであるか考えたのであるか。おおスールダッタ、そのときわたしは雲であり風であった、そしてお前も雲であり風であった。詩人アルタがもしその時に瞑想すれば恐らく同じうたをうたったであろう。けれどもスールダッタよ、アルタの語とおまえの語はひとしくなくおまえの語とわたしの語はひとしくない、韻も恐らくそうである。この故にこそあの歌こそはお前のうたでまた我々の雲と風とを御する分のその精神の歌である」と。

ここには宇宙詩の思想があります。それは、誰が書いたというものでない。同じものをいろんな人が分け合っている。インプットは同じ。詩人であっても詩人でなくとも同じものを感受する、がアウトプットは違う。一人一人の仕方や言葉で個性化されている。だからこれは紛れもなくお前の詩であるという。感受することは同じでも、出るときにはその人固有の形をとる。だから龍は龍の歌を、スールダッタはスールダッタの歌を歌う。

「おお、龍よ、そんならわたしは許されたのか」「誰が許して誰が許されるであろう。われらがひとしく風であり雲であるというのに。スールダッタよ、もしわたしが外にできることができ、おまえが恐れぬならばわたしはおまえを抱きまた撫したいのであるが、今はそれができないのでわたしはわたしの小さな贈物をだけしよう。ここに手をのばせ。」と言って赤い珠を吐いた。スールダッタはその龍の珠を貰います。その赤い珠は海の中にしまわれている小さなお経を取りにいくためのものです。いわば、神によって承認された恩寵の珠なのです。これが大正十年に書かれた「龍と詩人」です。ここに、宮沢賢治の詩法がはっきりと示されています。

### <隠し念仏>

宮沢賢治は浄土真宗の家に生まれた。父の政次郎は浄土真宗の篤信家でした。けれどもそれは表向きで、本当は宮沢家は「隠し念仏」だったのではないかと私は推測しています。「隠し念仏」には『くろぼとけ信仰』があります。私の友人に阿伊染徳美という人がいます。阿伊染さんは岩手県水沢出身ですが『わが隠し念仏』と題する本を書いたために、故郷の和賀村に立ち入れなくなった。隠していなければならないことを、本に書いたので村八分のようになったと、直接、阿伊染さんにも聞きましたし、その他のいろんな方からの情報を総合すると、宮沢賢治は「隠し念仏」が非常に嫌だったのではないかと思います。本人は法華経信仰になっていますし。

「隠し念仏」には幼児期にイニシエーション的な入信儀礼があります。仏壇の前に立てられたくろぼとけを息を止めて一心不乱に拝み、燈明の光に吸い込まれるような気がした時に、一気に息を吸い込んでハァと吐き出す。その時に「ターツケターマエ」と叫ぶのです。酸欠で半失神状態に陥った時に、新しい息と共にほとけが入ってくるわけです。

宮沢賢治が「隠し念仏」を嫌っていることは、「秘事念仏の大元締が」で「秘事念仏」のことを次のように

書いていることから推測できます。「秘事念仏の大元締が／今日は息子と妻を使って、／北上ぎしへ陸稲播き、  
／(中略)秘事念仏のかみさんは／乾いた牛の糞を捧げ／もう導師とも恩人とも／自分の夫ををがむばかり  
(中略)秘事念仏の大元締は／麦藁帽子をあみだにかぶり／黒いずぼんにわらちをはいて／よちよちあるく  
烏を追ふ／(中略)秘事念仏の大元締は／むすこがぼんやり楊をながめ／口をあくのを情けながって／どなっ  
て石をなげつける」「秘事念仏の大師匠、元真斎は妻子して、北上岸にいそしみつ、いまぞ昼餉をしたたむる。」  
このように秘事念仏を知っていること自体が、秘事念仏の世界にいたことを明らかにする。ですから宮沢賢  
治は隠し念仏のことをよく知っていたし、間違いなく隠し念仏的習慣の世界にいたと思います。

では何故、宮沢賢治は家の宗派を離れて、法華経の世界に転換していったのでしょうか。まず法華経の、  
世界観に感銘を受け、日蓮の教えと国柱会の田中智学の影響で転換していったことになります。最初は盛岡  
中学の時に天台宗の僧侶でもある島地大等という有名な学者から法華経の教義を聞いて感動したわけです。  
家の宗派は浄土教の流れをくむ浄土真宗でした。浄土教は比叡山で学んだ法然上人から始まり、末法思想の  
教義を持ち、天台千日回峰行などのように自力で修業して不動明王と一体化するとかはできないと考え、自  
力修行の聖道門ではなく、絶対他力の易行門を説きました。阿弥陀如来は、宝蔵菩薩であった時、四十八願  
の中の第十八番で、念仏往生の願を立て、法然も親鸞もそこに立脚します。そういう阿弥陀如来の本願に帰  
依する信仰を立てて、凡夫であるが故に、罪を犯す悪人であるが故に救済されるという悪人正機の信仰を定  
めます。この念仏往生信仰は法然から親鸞に受け継がれ、親鸞教団の中から「隠し念仏」も生まれます。京  
都が隠し念仏の発祥地でした。その後京都から北陸の方に広がります。

そうした隠し念仏の世界から、宮沢賢治が法華教の方へ行ったのは何故かといえ、この世は震災や冷害  
が起こって飢饉となり食べるものがない。そういう事態の中で、自分の家は質屋で、お金に困った貧しい人  
がやってくるわけです。家財を預けてお金を貸してもらおうという貧しい生活を見るにつけ、あの世で救われ  
てしあわせになるというのでは、この世の苦しみの現実をいつまでたっても解決できないではないか。この  
苦しい現実を変えてゆく菩薩像をこの現実世界の中で実現してゆく。この世を寂光浄土としなければいけな  
い。あの世の浄土や極楽往生信仰ではなく、この世の浄土を実現するという、社会変革に希望と期待を見出  
すわけです。そして、伝統的な法華経思想や日蓮思想から、より実践的で世界変革的な「世界霊化」の活動  
を展開していた国柱会の田中智学の運動、つまり、「世界の救済へ」という方向に身を投じていくわけです。

## II. 宮沢賢治における文学

### <短歌、自由詩、童話>

次に、宮沢賢治にとって文学はどういう力を持っていたのかを考えてみます。中学以来、石川啄木の影響  
で短歌を詠み始め、自由詩を盛岡高等農林在学時に書いていますが、萩原朔太郎が1917年(大正6年)に詩集  
『月に吠える』を出しており、賢治はその2年後の1919年にそれを読んで感銘を受け、萩原朔太郎の影響を  
強く受けます。その自由詩の中に、宮沢賢治の宗教、  
アミニズム、シャーマニズム、トーテミズムや、家の  
宗教である浄土真宗、また彼自身が求めた伝統的な法  
華経思想や、もっと実践的な田中智学的な現代法華経  
や、自然科学の世界観が全部混じりあいながら表現さ  
れていきます。

その宮沢賢治の生涯の中でとりわけ重要なのは、大  
正10年(1921年)に花巻農学校の先生になったこと  
と、大正15年(1926年)に農学校を辞めて、羅須地人  
協会を結成し、その理念の宣言・マニフェストであ  
る『農民芸術概論綱要』を発表しますが、その活動  
も1年ほどしか続かない。それで彼はいろいろな挫折の中、三十七歳で亡くなりました。



保坂嘉内の描いたハレー彗星

大正10年1月に賢治は東京に出奔し、国柱会を訪ねて布教使になりたいと申し出るのですが、断られ、筆耕の仕事をしてしながら、創作に没頭することになります。そこに至る過程を少しトレースしておきます。

後に盛岡高等農林で宮沢賢治の親友となる保阪嘉内は、甲府中学性だった明治43年(1910年)、ハレー彗星を目撃し、駒ヶ岳、北岳、観音岳、薬師岳の上にかかるハレー彗星の絵をかきました。その時、この絵に次のような言葉を書き添えています。「銀漢ヲ行ク彗星ハ 夜行列車ノ様ニニテ 遙カ虚空ニ消エニケリ」。これが銀河鉄道のイメージの原点ではないかと云われています。ハレー彗星は1910年5月に地球に最も近づきますが、その年は多事多難でした。白樺派の旗上げ、大逆事件、日韓併合、柳田国男著『遠野物語』が出版されたり、神社合祀反対運動により南方熊楠の逮捕、東京大学助教授福来友吉の千里眼事件、西田幾太郎の京都大学助教授就任などなど。そして翌明治44年1月には、西田幾太郎の『善の研究』が出版されています。そういうもろもろの大きな社会の動きがある中で宮沢賢治は短歌を書き始めています。「鉄砲が つめたくなりて みなみぞら あまりにしげく 星 流れたり」とかの短歌も、ハレー彗星や銀河流星群を想起させるような短歌ですが、これは盛岡中学時代の賢治の参加作品です。

大正10年、賢治25才の時に比叡山に登って次のような短歌を詠んでいます。「根本中堂 ねがはくは妙法如来正徧知 大師のみ旨 成らしめたまえ」「うち寂む 大講堂の薄明にさらぬ方して われいのるなり」「おお大師 たがひまつらじ ただ知らせ きみがみ前のいのりの知らせ」「われもまた 大講堂に鐘つくなり その像法の日は去りしぞと」「みずうみは 夢の中なる青孔雀 まひるながらに寂しかりけり」。

法華経布教の殿堂の地の延暦寺で祈りを捧げ、大講堂で鐘を突き、教えの守られている正法の時代を過ぎ、像法の時代も過ぎている、その次の末法の時代において、どのように「正法」を説き、伝えることができるのかと問いかけているわけです。

宮沢賢治は短歌から自由詩に向かい、さらに童話を書き始めますが、大正7年(1918年)に創刊された「赤い鳥」などの影響もあったと思います。しかし、宮沢賢治は独自の童話を書いていきます。その童話の代表的なものが未完成作品である『銀河鉄道の夜』です。

### <銀河鉄道の夜>

『銀河鉄道の夜』には深い「孤独」があります。「どうして僕はこんなになさしいのだろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向ふにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしづかでつめたい。僕はあれをよく見てころもちをしづめるんだ」。

主人公のジョバンニの家は貧しくお母さんが病気で、お父さんは行き先が不明です。恵まれた家庭環境とはいえません。不幸があり、悲しみを抱えています。その悲しみを浄化し、昇華しなければならぬ。それにはどうすればいいかという、心もちを鎮めることです。つまり、心を清らかに透明にすることです。「小さな青い火」を見て心を鎮める。その「青い火」とは比叡山に伝わる「止観」の法灯のようなものです。

伝教大師最澄の書いた「山家学生式」の中に、「国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす。一隅を照らす、これすなわち国宝なり」という言葉が出てきます。国宝とは「道心」をもって一隅を照らす活動をする者です。ということは、比叡山延暦寺は国宝の養成機関であるということです。今、根本中央は国宝ですが、最澄の提唱した「国宝」は「物」ではなく「心」、それも「道心」です。道心をもって時代の闇を照らし出す者こそが国宝なのです。この最澄的な国宝観は宮沢賢治に真つすぐに受け継がれていると思います。『銀河鉄道の夜』では、それはほんとうの幸いを求めていく行為として示されます。

この『銀河鉄道の夜』という童話は「ほんとうのさいわい」を求めていく旅、すなわちスピリチュアリティの探求と論理が描かれています。ほんとうの幸いを突き詰めると、仏教的言葉では仏性となり、今風に言えばスピリチュアリティの探求と実現となります。人間の本当のいのち、真心、根源を求め、築いていく。宮沢賢治はそれを探求するだけでなく、実践し実現していくことをジョバンニ少年に託します。

『銀河鉄道の夜』でとりわけ印象的なのは「孔」です。探求すれば必ず「孔」に出会います。「あ、あそこ石炭袋だよ。その孔だよ」カムパネルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいてあるのです。その底がどれほど深いのかその奥に何があるかいくら眼をこすって



のぞいても何も見えずただ眼が心身と痛むのでした。ジョバンニが云ひました。「僕もうあんな大きな暗の中  
 □でもこわくない。まっとみんなのほんとうのさいわひを探しに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進  
 んで行かう。」

この「孔」は非常に象徴的なものですが、「天の川の一床に大きなまっくらな孔」がドーンと開いているの  
 です。その「孔」を通して、死の世界や霊の世界に入っていきます。シャーマンもそういう「孔」からいろ  
 いろな情報とエネルギーを得ます。そういう、神秘的な情報とエネルギーの往来できる「孔」が開いている  
 のです。その「孔」を通して、見える世界と見えない世界が交わる。強いて言えば、海と川の汽水域みたい  
 なものが「孔」なのです。

#### <農民芸術概論綱要>

宮沢賢治は大正15年(1926年)に花巻農学校を辞  
 めて羅須地人協会を設立し、そのマニフェストとし  
 て『農民芸術概論綱要』を著わします。その序に  
 は、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸  
 福はありえない」「われらは世界のまことの幸福を索  
 めよう 求道すでに道である」と書かれています。  
 ほんとうの「さいわい」を探しに行くという『銀河  
 鉄道の夜』の中の言葉と、「世界全体が幸福になる」  
 ことや「世界のまことの幸福を求めよう」という言  
 葉には少し違いはありますが、まったく同じメッセ  
 ージを伝えています。



宮沢賢治の描いた日輪と山 (資料提供 林風舎)

#### <グスコーブドリの伝記>

童話のグスコーブドリの伝記はどうかというと、まさにそれは、『銀河鉄道の夜』のその後が表現されてい  
 ると言えます。冷害などの自然災害が起こり、ひどい飢饉になり、激しい貧困の中で食べ物もなくなってい  
 きます。主人公のグスコーブドリのお父さんとお母さんは、子供のために食べるものを少し残して森の中に入  
 って行って帰って来なくなります。つまり、自分のいのちを犠牲にして、子供を生き延びさせたのです。  
 そこで、妹のネリと二人だけになりますが、その妹は人さらいにさらわれてしまい、ブドリは一人きりにな  
 ってしまいます。そして、工場や農場で働いたりして苦しい目にあいながら、テレビドラマの「おしん」の  
 ようにけなげに耐えて生き延びます。

グスコーブドリは、そのような苦境の中にあっても決して向学心を失わず、心をまっすぐ持って歩んでゆ  
 くうちに、クーボー大博士に出会い、博士に師事して火山技師になります。クーボー大博士はグスコーブド  
 リに知識と知恵を授けます。お金もかからないし卒業のためにたった9時間の授業で1日あったら卒業でき  
 る授業を教え、それをグスコーブドリは必至で受け取るのです。最澄的に言えば、一隅を照らす人になれば  
 国宝になりますが、ここでは、その国宝になるには試験に合格しなければなりません。遊んでばかりいるも  
 のは三千回でも落第します。あまりに及第する人が少ないのでクーボー大博士はいつも機嫌が悪いのです。

ついに、グスコーブドリは、学校に入らなくても勉強する仕方を獲得して、学校に入らなくても学ぶこと  
 が出来るようになります。それができればどこに行っても実社会に役立って自分自身で学んで生きてゆくこ  
 とが出来るのです

「すなわちこのところから昔の方を見ると昔というものがいかにもかういふ風のものであると見える。決  
 してもうこの外でないと見える。ところがこのところから見れば昔というものがかういふ風のものである  
 と大ぶ違って見える。そしてもうその外のものでないと見えるから、前のこの見方はうそだと云ふ。ところが  
 もっとこの辺に来て見るとかういふ風に見えてくる。そしてどれがほんたうであると何人も云ふことがで  
 きぬ。みんなはしまりに首をかたむけてどうもわからんと云ふ風にしていましたがブドリにはみんななるほ  
 どと思はれました。」

この世界は実相としては一つであっても、いろんな見方や考え方があるから、それぞれの眼に違って見えます。天台には「十界互具」という考え方があり、この世界には地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏という十の存在世界の階層があるので、地獄に住む心が狭くねじ曲がって偏屈な人には見えない世界がありますが、仏からするとすべての世界が見えます。そういう見え方を学び、何が本当であるかを知ります。「なるほど」とは、そのような世界の納得の仕方です。

ここでブドリは、いわば免許皆伝をもらって、「一隅を照らす国宝」のひとつの火山技師になります。そして、火山局で働き火山を制御するために身を挺していきます。「ああ、私はいま爆発する火山の上に立ってゐたらそれがいつ爆発するかどっちへ爆発するかそれはきっとわかります。そしてそれがみんなの役に立つといふなら何といふ愉快なことせう。どうかこれから教えて私を使ってください。どんなことでもしますから」。これはまさに国宝の一隅を照らす行為であり、使命を達するということです。

火山技師になったグスコブドリにはしばらくは楽しい生活が続きますが、彼が二十七才のとき、またあの恐ろしい寒い気候がやってきます。クーボー大博士が云ひました。「きみはどうしてもあきらめることができないのか。それではここにたった一つの道がある。それはあの火山島のカルボナートだ。あれは今まで度々炭酸瓦斯を吹いたようだ。僕の計算ではあれはいま地球の上層の気流にすっかり炭酸瓦斯をまぜて地球ぜんたいの温度の放散を防ぎ地球の温度を七度温にする位の力をもっている。もしあれを上層気流の強い日に爆発させるなら瓦斯はすぐ大循環の風にまじって地球全体を包むだろう。けれどもそれはちょうど猪の首に鈴をつけに行く鼠のやうな相談だ。あれは爆発するときは逃げるひまも何もないのだ」

ここで、グスコブドリは「大循環の風になる」と言って自らを犠牲にし、火山の爆発を小規模にする方策を実施し、多くの人を救います。「私にそれをやらせてください。私はきっとやります。そして私は大循環の風になるのです。あの青ぞらのごみになるのです」。そういつて彼は自らを犠牲にして、冷害を防ぐために火山を爆発させて風になっていくのです。

グスコブドリは大変な貧しさと困窮の中で、苦しみに耐えてけなげに生き抜いていきます。本当のさいわいを学びます。それを学び実現していく賢さと強さがあります。グスコブドリは、研究熱心な上に勇敢です。『銀河鉄道の夜』のジョバンニはまだ子供です。本当のさいわいを求めていく意思を目覚めさせる話です。けれども、その時、最悪の状態を切り抜けて行く手がかりを掴んでいます。だから『銀河鉄道の夜』は主人公のジョバンニが生きていく希望やビジョンを探求する物語です。その後、ジョバンニがどうやってこの苦しい現実世界を生き抜いて行くのか、ジョバンニの次のステージが『グスコブドリの伝記』となります。宮沢賢治が生きていた時代、岩手県にも何度もひどい飢饉が起こっています。このような苦しみを切り抜けてゆく道を、どうやってこの時代、この状況の中で切り拓いていけるのか、それを宮沢賢治は示めそうとしたのです。これを要約すると、『銀河鉄道の夜』は「ほんとうのさいわい」を求めていく旅＝スピリチュアリティ(霊性)の探求と論理であるのに対して、『グスコブドリの伝記』は、「ほんとうのさいわい」を実現していく行為＝スピリチュアリティの実践と倫理といえます。

#### <「宮沢賢治」という冒険と挑戦—芸術というワザによって「心」と「銀河」をつなぐ試み>

「ほんとうのさいわい」を実現していく時に、自然からエネルギーをとって、それを社会に、人々に生きる力とし活かすワザが必要になります。そういう未来の想像力の発信をするためには、みんなが芸術家でなければならぬ。みんなが芸術家でありながら、同時に、それぞれに並び立ち、心をつつにできる形を実現しなければならぬ。それを実現するためには、心を静かにする瞑想や座禅と、理知的な科学の実験による確かめが必要になります。宮沢賢治は科



講演司会 金野 衛 副会長

学と信仰の一致と統合を目指しました。科学と宗教は最後は一致するというのが、法華経の信奉者であった宮沢賢治の方向性です。

食べ物に対しても四種の食べ物を区別しています。第一段階は、肉体の食。つまり、普通の食事となるたべものです。第二段階は、自然の食。光や風などです。第三に靈魂と食。これが言葉です。詩です。そして第四に「兜率の天の食」。このように食べ物も何段階もあるのですね。

現実を変革していく時、自然の中にある力、エネルギーを取ることが大事になります。それが、「龍の声を聴く」というメタファー（隠喩・暗喩；あからさまな比喩表現を使わない喩えのこと）になります。そうした自然エネルギーや声を自分の中野深い無意識に取り込み、無意識の中から行動する。そのことを、「諸作無意識中に潜入するほど美的の深と想像力はかはる」とか、「無意識即からあふれるものでなければ多く無力か詐為である」と言っています。また、「新たな詩人よ／雲から光から嵐から／新たな透明なエネルギーを得て／人と地球にとるべき形を暗示せよ」とも言っています。それも、アミニズム・シャーマニズム・トーテミズム的な世界感覚と言っていると思います。無意識は、実はこの世界そのもの、宇宙そのものの深い深いいのちの根源で、その根源の声に耳を澄まして、そのメッセージを聴くのです。そして、銀河系、宇宙、三次元、四次元、世界は各種階層をなしているわけです。法華経の生命観が根底にあります。この時代の最先端の科学、進化生物学や相対性原理などの天文学の科学的世界観と仏教的世界観とをつなげながら、新しい装いを持った銀河教、宇宙教、四次元教を宮沢賢治は実験しようとしたと言えます。

#### <宮沢賢治の多面性（怪人20面相？）>

宮沢賢治は詩人・童話作家であり、シャーマン、教師、農民芸術運動家、求道者、修験者でもあります。いろんな顔を持つ多面体で、銀河宇宙に駆け上がってゆく天狗、修験者、シャーマン、詩人、芸術家でした。そして、普遍的なものや特殊なもの、ユニバーサルとローカルをつなぎ、観音菩薩が三十三身に化身するようにいろんな形に返信・変形した。文章も変え、短歌、自由詩、童話といろんな姿に変えて、この世界に希望や夢や理想を可視化し、気圏オペラの役者の奏でる四次元世界を構想したのです。

#### <宮沢賢治の宗教的世界観>

宮沢賢治の宗教性というのは、一番深い魂の本能にしたがって生きていく、そういう心の深い霊性・スピリチュアリティの声にしたがって生きて行こうとする、別の言葉で言えば四次元感覚で世界をいきっていくということです。宇宙の中で、銀河系のように大きく広がってゆく、無限大に広がってゆく世界の中で、久遠実成の本仏が顕現するような「ほんとうのさいわい」の実現を求めていくこと。そして実際には、修羅の世界にいても、それを菩薩に転じていくような生き方をしてゆくこと。宗教の違いがあっても、宗教、宗派の違いを超えて行く方向性を示めそうとしたわけです。

『銀河鉄道の夜』は、宮沢賢治にとって、無意識の世界、心の奥深い別世界と現実界をどうやってつなげて、この現実世界の救済的なものにどう自分自身が入っていくのか、「ほんとうのさいわい」とはどういう実践行為なのか、そこに一隅を照らす宮沢賢治の思想と実践があります。『銀河鉄道の夜』は、「ほんとうのさいわい」を求めていく旅＝スピリチュアリティの探索と論理。それに対して、『グスコブドリの伝記』は「ほんとうのさいわい」を実現していく行為＝スピリチュアリティの実践と倫理。それがわしの結論です。

ご静聴ありがとうございました。

ご静聴ありがとうございました。

#### <質問と応答>

##### 1. 最初に吹かれた楽器名は？

「岩笛（いわぶえ）」です。日本では縄文遺跡から穴の空いている石が出土しています。例えば、石の中に穿孔貝が住み着いて穴を開け、それが死んでし



「石笛」の説明をする鎌田東二先生

まっって貝殻だけ残っているようなものもあります。あるいは、風化や侵食によって作られたものもあります。いずれにしても、天然のものです。宮沢賢治は「サガレンと八月」という樺太を舞台にした童話の中で、海岸で穴の空いた石「穴石」を拾う場面を描いています。私の吹いたこの石笛は、1995年8月6日、広島原爆投下50年の節目に、アイルランドの西の果ての島、アラン群島の中の小さな島であるイニシュア島で拾いました。広島に向かって祈りを捧げて帰ろうとした時、海岸にこの石が「僕を吹いて！」と私に呼びかけてきたんです。皆さんは宮沢賢治の話聞いたところですから、この話が信じられるでしょう。いや、ほんとうなんです。毎朝この石笛を吹くことから私の一日が始まります。

## 2. 科学と宗教の関係、レジメにある銀河系意識の水平軸とは？

宮沢賢治は『銀河鉄道の夜』の第3稿の中で、「おまえがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考えとうその考えを分けてしまえばその実験の方法さえきまればもう信仰も化学と同じやうになる」とブルカニロ博士に言わせています。賢治には、科学と宗教は矛盾するものではなかった。法華経が伝えてきた信仰の心理と科学が明らかにする実験の心理は一致すると考えていたのです。特に、仏教は心もちを静かにする瞑想法があります。その瞑想による心の鎮めによって争いを無くし、対立を超えてゆくことができると考えていました。最澄が作った延暦寺の最初の名前は「一乗止観院」と言いますが、「一乗」とは法華経のこと、「止観」とは集中と観察の二つの瞑想法を指します。科学は誰しもうも実験によって確かめることができる。実験によって嘘か本当かを見分けることができる。信仰も経典と瞑想によって確かめることができる。そこで、信仰と科学(化学も同じ)も同じようになると考えていたのですが、私もそういう考え方を取ります。が、残念ながら、宗教においては今に至るも様々な対立が報じられてきました。宗教も化学も統合には程遠い状況です。人間が、宗教を生み出す心、科学を生み出す心を持ち、宗教も科学も人間の心を動かしているものならば、心を大きくし、心をきれいにするという方法において、宗教も科学ももう一つ脱皮していくことができる、というのが宮沢賢治の考え方で、私も基本的にそう考えています。嘘の科学はありませんが、誤った科学はあり、誤った信仰も多々ありえます。オーム真理教もそうでした。そういう信仰の中にもいろんな段階や区別があります。そういうものを、間違っているもの、おかしいものとして、どうさらに切り啓いていくことができるか。新しい宗教であり新しい科学が必要であると思います。そういう意味で私たちは新しい宗教を生み、新しい科学を生みださなくてはならないと。

水平軸についてですが、私たちにとって地球に生きている以上は水平軸は必要です。言いたかったのは、銀河系の世界は私たちの宇宙という世界に内在している延長の中にある。四次元というのは銀河系を超えた世界、つまり垂直軸を示していると思います。つまり、四次元を超えたような五次元、六次元もあると数学は言いますが、賢治は、別の人間の世界、違った世界、つまり違った空間や違った生き物がいる、そういう世界を前提として、いろんな空間や世界があると考えていました。それが四次元的な感覚だとすれば、この私たちの三次元の世界の中で広がっている互いの宇宙意識が水平軸としてある。四次元とか銀河系とかは、宮沢賢治の生きた1920年代前後の数学や相対性理論などの影響を受けた言葉です。



2013年宮沢賢治81回忌法要 導師ご挨拶

## 3. ビジテリアンについて

私は何でも喰いです(笑)。ビジテリアンではありません。宮沢賢治の「ビジテリアン大祭」の中にこんなのがあります。「仏教の精神によるならば慈悲である、如来の慈悲である。完全なる智慧を備えたる愛であ

る」。これはビジテリアン大祭の中でビジテリアンの主人公が仏教の精神を説いている言葉です。「仏教の出発点は、いっさいの生物がこのように苦しく、このようになんともいえないと、これらいっさいの生物ともともに、この苦の状態を離れたいと言うのである。その生物とは何であるか、そのことあまりに深刻にして諸氏の胸を傷つけるであろうがこれ真理であるから避け得ない。率直に述べようと思う。全ての生物は皆無量の劫の昔から流転に流転を重ねて来た。流転の階段は大きく分けて九つある」。これは十界論が背景にある。「われらはまのあたりにその二つを見る。一つのたましいはある時は人を感じず。ある時は畜生、すなわちわれらが呼ぶところの動物中に生まれる。ある時は天上にも生まれる。その間にはいろいろの他のたましいと近づいたり離れたりする。すなわち友人や恋人や兄弟や親子やである。それらが互いにはなれまた生を隔ててはもうお互いに見知らない。無限の間には無限の組み合わせが可能である。だからわれわれのまわりの生物はみな長い間の親子兄弟である。異教の諸氏はこの考えをあまり真剣で恐ろしいと思うだろう。恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ」。

こういう思想に基づいて宮沢賢治は「生き物を殺さないビジテリアンの道」をある時点から実践したわけです。私も20才くらいのころ、天台の千日回峰行の「堂入り」の行に近い、正味八日間の水も飲まない完全断食をしましたが、その時、心臓に激痛が走って死にそうになりました。臨死体験に近い状態ですね。断食で命を落としそうになった時、食べることに對する意識が変わりました。命を無駄にすることは絶対に避けなければならないが、食べ物として与えられた生命を感謝の心をもってありがたくいただく方が自然で無理がないと考えました。自分としては、無理をしない感謝して食べる生き方を選びました。ビジテリアンの生き方も肉食も両方あっていいと思います。仏教には、小乗と呼ばれてきたストイックな生き方も、大乘と呼ばれてきた融通無碍な精神や生き方もありますから。平坦に普通に生きる中で命の大切さを実現できることをやり遂げたいと思っています。私自身は神道の神主の資格を持つフリーランス神仏習合神主ですが、家は真言宗で、従兄が仁和寺の執行をしていたりして、四国の徳島ですから、小さい時からお遍路さんの歩く環境で育ち、弘法大師空海が一番偉いと思っていました。が、比叡山の麓に住んで、初めて私は伝教大師最澄の偉大さに気づきました。今は、比叡山のお山自体が国宝という感じがしています。私にとって比叡山は拠り所ですので、今後ともよろしく願いいたします。

(本稿は平成25年9月21日の賢治81回忌における、比叡山延暦寺会館での講演録です)

参考文献：宮沢賢治について論じた鎌田東二教授の著作

『エッジの思想—翁童論Ⅲ』新曜社、2000年

『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波現代文庫、2001年

『神と仏の出逢う国』角川選書、2009年

『霊性の文学 言霊の力』『霊性の文学 霊的人間』『聖地感覚』

いずれも角川ソフィア文庫、2010年/2013年

『現代神道論—霊性と生態智の探究』春秋社、2011年

『古事記ワンダーランド』角川選書、2012年 井上ウィマラ・西川隆範・鎌田東二他

『仏教は世界を救うか』地湧社、2012年

『「呪い」を解く』文春文庫、2013年

『歌と宗教—歌うこと。そして祈ること』ポプラ新書 2014年

発行代表者 関西岩手県人会 鎌田龍児 岩手県大阪事務所内 (Tel & Fax 06-6344-5969)  
〒530-0001 大阪市北区梅田1丁目3番1-900 大阪駅前第1ビル9階

編集代表者 関西宮沢賢治の会 深田 稔 関西岩手県人会内